



追悼 故 榊井迪夫 名誉教授

本学名誉教授榊井迪夫先生は、平成四年六月十一日心不全のため七十八歳の生涯を閉じられました。

榊井先生は昭和十三年広島文理科大学をご卒業以来、戦中戦後の激動期を四十年の長きにわたり、母校である高師・文理大・広大で英語学英文学の研究と教育に情熱を傾けられました。学内においては、評議員・文学部長、学外にあっては日本英文学会の評議員・理事などの要職を歴任されました。

先生のご専門は中世イギリスの詩人チヨースーの言語で、昭和三十六年東京大学に提出された学位論文の一部はその後公刊され、世界のチヨースー学徒の必読文献となり、わが国の中世英語英文学研究を世界的水準に高めました。

もともと先生は、象牙の塔に安住することをよしとせず、森戸辰男元学長と共に広島日英文化協会を設立して、国際平和都市の発展に寄与されたほか、自ら原爆の洗礼を受けられた先生は、飯島宗一元学長らと共に平和科学研究センター創設に尽力されました。

昭和五十二年に、チヨースー研究および日英の学術文化交流への貢献により、エリザベス女王より大英帝国上級勲章を、同五十九年には中国文化賞を授与される榮譽に輝かれました。

先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(文学部英語学講座 河井 迪男)



追悼 故 頼桃三郎 名誉教授

広島大学名誉教授頼桃三郎先生は、平成四年六月二十六日逝去されました。享年八十一歳。ここに謹んで哀悼の意を表します。

先生は、昭和八年東京帝国大学文学部卒業、同十年大学院修了。昭和二十二年広島師範学校教授、のち広島大学教育学部三原分校・東雲分校勤務(通算二十七年間)。昭和四十九年停年退官、名誉教授となりました。その間、附属三原小・中学校長および幼稚園長併任(十年間)、附属図書館分館長(九年間)などの要職を兼ね、戦後の大学再建のために尽力されました。

先生の専門は国文学ですが、殊に近世文学に造詣ふかく、主著『近世文壇史話 詩人の手紙』では、頼春水・山陽父子とそれらを巡る人々の交流を通して、同時代の上方文壇の動向を鮮やかにとらえ、その手固い実証的な研究が学界の注目を浴びました。

しかし、頼先生の本領は、もともと柔かく、ナイーブな文学精神にあり、その結晶として三冊の随筆集『十菊随筆』『去年の雪』『十菊新抄』を残されました。辛口の批評性と、上品な洒脱性とが程よく調和した名文の数々は、現代随筆文の逸品と称すべきでしょう。

広島大学における先生の最終講義はもう十八年も昔のことですが、その光景は今なお鮮やかに蘇ってきます。講義題目は「女嫌いの文学」でした。これは先生一流の逆接的表現です。こよなく人間を愛し酒を愛された頼先生の御冥福を、心よりお祈り申し上げます。

(学校教育学部言語教育講座 檀上 正孝)